
妖土珍奇 ～普通に幻想入り～

Omixi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖土珍奇 〜普通に幻想入り〜

【Nコード】

N4073V

【作者名】

Omixi

【あらすじ】

東方projectの二次創作SSです。

オリキャラ注意。

真面目なバトルはそんなにないです。

幻想で紡がれた、喧騒から隠された里——幻想郷。

妖しいほどに艶やかな、艶やかなほどに妖しい魑魅魍魎が、縦横無尽に跋扈する地。

全てが忘れられた、全てに忘れられた存在が迷い込んでくる地。

そんな妖かしの地の土に、珍妙奇天烈な輩が足を踏み入れる。
忘れられたわけでも、迷ったわけでもなく、『普通に幻想に入り浸
った』その人間。

幻想郷の静かな水面に、波面が立つ。そして波乱が起ってゆく。

そんな感じです。楽しんでってください。

気ままな宅配便

蜃気楼たなびき盛る夏。衰えを知らぬ陽光はあくまでも平等に、山々谷々平々凡々地々浦々と照りつけられていた。

青く茂った山共に囲まれたかなり辺境の田舎で、人口数たったの無人。……という理由だけで今後十年は整備されなさそうな黄土色のデコボコ道の真ん中から、エンジンの吹いている音が辺りに響き渡る。

見てみれば、十年は使われたであろうみすばらしい一人乗りの單車が、上に男女二人分の影を載せ、悲鳴をあげて走っているのが視界に入る。

道なりにそれなりに、逸れないように揺れないように。運転している男の方は、サドルにしっかり腰をおろし、こんな辺鄙な場所でも律儀にヘルメットを被ってハンドルを切っている。

場所なしにそれなりに、触れないように落ちないように。男に背を向けるノンヘル女は、バイク後部に取り付けられたリアボックスに、危なく腰をかけて足を宙ぶらりとさせ、後輪にかかどが削られるか削られないかを楽しむチキンな遊びに心奪われていた。

夢中な足と同期して、ボックスがギシギシ唸る様子を見かねた……いや聞きかねた男は、後ろを向かずに忠告する。

「折れるよ」

女は一旦足を止め、男の背中に目もくれず、ただぽつりと応える。

「大丈夫。軽いから」

そして再びギシギシと体重の上下移動の音が聞こえてきた。地面に太陽が映しこんだ女の足の影は、もうタイヤに触れているようにも見える。

男はそれを一瞥してもう一度だけ女に言う。

「折れるよ」

「足が」

それを受け、今度は足を止めぬまま、女はただ呟く。

「大丈夫。軽いから」

無表情に同じことを繰り返す女に、男は少し口角を上げて返す。

「口が？」

「尻が」

「……………」

間髪入れない女の言葉に、しばしと無言の間が空いた後、返答に窮していた男が口を開く。

「込むね」

女はその一言に顔を上げ、右手を額にあてて、わざとらしく周囲を見渡し、

「人いねーじゃん」

と返した。男は前を向いたまま、

「尻だよ」

と一言。女はそれを聞くと、ニイツと猫のような笑みを浮かべる。

「ああ、だから何も言わなかったんだ」

「下向いて下言シモわないでよ」

「前向きに生きてるから耐性つかねーのさ」

「そうでもないと事故るでしょ。……それとも湯気ゆげちゃん、背中
でグリップ捻ひねってみたい？」

嘲笑を含んだ男の問いに、湯気と呼ばれた女は笑みを崩さぬまま、
侮蔑の演技を言葉に添えて、

「生きてて一度も道を踏み外さない奴なんて信用ならないね」

と放つと、今までニヤついていた男も遂には吹き出して、

「それ、知ってて言ってる？」

と思わず問いたです。女はやつと男の方を向き、その背中を見なが
ら、

「知ってて言ってる」

そう楽しげに告げた。

気ままな宅配便（後書き）

東方キャラなんて最初から要らなかったんや！！

意のまま宅配便

「ねえ」

バイクに揺られるまま体を揺らし、風に吹かれるままに短いクセ毛をなびかせた湯気は、猫の様な陰湿さを含む視線を男に配る。

「何」

素っ気無く応える男は、脇目もふらず、相変わらず安全運転を心掛けていた。

「いつになったら着くのさ」

顔こそ差して機嫌を悪そうにはしていないものの、その声色はまるで到着しないのは男のせいだとも言わんばかりに重なっていた。

「良い加減にしろって言うか、悪い機嫌になってきたよ」

「良い加減なさじ加減こそ大事なモノだよ湯気ちゃん。旅はスロー再生の様なものだ、って言うじゃない」

「言わねーよ。適当なこと吹かすんじゃない。全力でブン投げるぞ、お前のその歪んだ計量スプーン」

「スローだけに？」

「スペル違うからな」

「……まあ全力で投げてくれて構わないよ。湯気ちゃんなら許してあげる。」

いいやむしろ湯気ちゃんに投げられたい。湯気ちゃん、僕のことを投げてくれ。

湯気ちゃんに投げられる瞬間をこれ程までに心待ちにしていた自分がいると知って僕自身驚いているくらいだ。
なんなら僕の人生は湯気ちゃんに投げられるためにあったと言ってもいい。

さあ湯気ちゃん、全力で僕をあのオリオンの一等星にしてくれ！」

「あ、ゴメン。『……』くらいから聞いてなかった」

「湯気ちゃんは行間が読める子なんだね」

「……………」

意図してか、それを機として二人の会話は途切れる。ボスボス咳き込むマフラート、蟬の集団読経が二人の耳を支配し、時折野鳥の一鳴きが鼓膜の保養として恵まれる。

「湯気ちゃん」

意外にも、男の方がその淡とした沈黙に先陣を切った。

「もうすぐ着くよ」

今度は、湯気は男の方を見ずに呟く。

「そう」

だいぶテンションの下がった様子の、どちらかと言えばこちらがデフォルト
通常状態である湯気を見てして、男は何の感慨も得ることはなかった。

続けて口を開く。

「湯気ちゃんが、ソファアー代わりに腰掛けてるそのボックスの中にある、よくわからない小包だけど」

一つ区切って。

「そろそろ、それと一緒に渡された地図を確認しておいた方がいいのかもしれない。僕らのこれから行く——」

「幻想郷」

さてこれから長回しの決め文句を捲し立てようと意気込んでいた所に、冷たい水を差されて、男は少し落ち込んだらしい。バイクのスピードが少し落ちる。最も、表情に出ることはないのだが。

「——そう、それ。幻想郷ってトコはどうやら、

道往く道が未知の道で迷い道、町はマチマチ、森はモリモリ、妖怪がバケバケ出てくる、

背筋で釘が打てるほどの場所らしい。幻想郷初心者の僕らにとって、地図無しで渡り歩くってのは不可能だろう。僕らはただの人間だからね」

結局長回しをこなした男は、腰をサドル前方に持つてゆくことで、湯気に催促をする。

そちらを見てもいないのに、湯気は若干面倒くさそうな顔をして、ボックスからサドル後方へとちょこんと尻を下ろす。そして先ほどまで椅子として使用していたその鍵を開け、蓋を押し上げる。

黒いウレタンの内壁の中には、目が痛くなるショッキングピンクを基調に、黒いハートや切り絵の様な歯車がゴシック調に配置された外装のスライド式携帯が、猫や鳥などのキーホルダーの大所帯を穴一つに抱えて座っている。その下に先ほどの、ボックスの半分を

占める大きさで、茶色い包装紙にくるまれた『荷物』があった。

荷物をとろうと携帯を脇にどかすが、それにつられてあまりにも大量の大小様々なキーホルダーが邪魔をする。湯気は荷物に引っかかっている部分のキーホルダーを引きちぎり、道に投げ捨てた。

そうしてやっと手にとった荷物をひっくり返すと、裏側に四つ折りにされた紙切れが安全ピン一つで包装紙に止められていた。ピンは、外そうと試みもされず、引きちぎられると即座に宙を舞った。その鋼色で華奢な楕円のボディに、太陽の光を精一杯きらめかせながら、優雅に黄土色の地に落ちる様子を、誰にも魅せつけることは叶わなかった。

「妖怪の山」

湯気がぼつりと読み上げる。

「おお、直接的だね、まんまだね。その名前、実直とも言うべきか、偽る必要もないという潔さが気に入ったよ」

大して思ってもなさそうな顔とは裏腹に、感慨深い声を上げて男が感想を述べる。

湯気は再び目的地を淡々と告げる。

「妖怪の山……守矢神社」

「嗚呼、そこだね。僕らの配達先は！」

「守矢神社……東風谷早苗」

「そう、その女だ！^{ひと}僕らを待っているのは！」

先までのぶつきらばうで能面のようなだった男の顔はそこにはなく、『気持ち悪い』寸前の屈託の無い屈折した笑顔が代わりに顔面に張り付いていた。

「待っていてねー、東風谷早苗さん。僕ら『東雲宅急便』^{しのめたっきゅうびん}が、しー
っかりと責任を持って、お荷物をお届けに参りまーす！」

唐突にそう大声で叫ぶ男。傍らで女は下を向いたまま人差し指を
耳の穴に突っ込んでいた。

周りの山々に反響する、男の宣言。その各々に居た鳥共がそれを
受け、一斉に霧散するように飛び散っていくのを、二人は別に注意
して見ようともしなかった。

意のまま宅配便（後書き）

東方キャラの名前が出てきてついに幻想入りっぽくなってきましたね！

でも実はまだ幻想入りしてないんですよ！！

せせらぎ宅配便

粘土色の重い雲から一番乗りで地に向かって進み始めた小さな粒は、どこかの見知らぬ土地の、名前も知らない木の枝先の、生まれただけの幼い葉へと落ち着く。

脈を精一杯四方に走らせるその緑色の葉は、やがて下り坂を押し進んで来る怒濤の雨の濁流に腰を曲げられ、ひたすら耐え続ける。その根幹にそびえる巨大な母なる大木は、命の恵みに今にも踊りそうな気分だったが、その手先の指先の爪先の葉はそうも言っていない。毎瞬毎瞬が気折れするかしないか、木折れするかしないかの命を賭けた生存抗争なのだ。葉を食いしばって、耐えるべき争いだ。

そうして天蓋の下で繰り広げられている、多くの長き攻防が終わりを告げ、気抜けしたように薄くなる綿のような白い雲から、雀の涙と言わんばかりの最後の一滴が崩れ落ちると、どこかの見知らぬ土地の、名前も知らない木の枝先の、生まれたばかりの幼い葉へと落ち、跳ねる。

あいにく大木の枝先の目下には、せらせらと流れ渡る幅を利かせた川が地面に掛かっており、先ほどまで一粒だった、跳ねた雨粒のかげら達は、それぞれ別れを惜しみながら、互い違いに流水の中へと飛び込む。

そうした小さな奇跡のような出来事が無数に集まり、更に川を大きなものへと変えていく。そうしてそれに揺らがれながら泳ぐ魚達は、時たま顔を水面にのぞかせ、丘の様子を伺うように息を継ぐ。

例えば、紅き霧に包まれた森の傍を、無い首をかしげ、訝しみながら。

例えば、雪に手間取る暖春の訪れに、無い手をこまねき、待ちわびながら。

例えば、丸き月が空を支配する様を、無い足を浮つかせ、仰ぎ見

ながら。

例えば、辺り一面に咲き誇る華共に、無い声を挙げ、感じ入りながら。

例えば、妖の山の上の見知らぬ社に、無い瞼をこすり、不思議がりながら。

例えば、突然震え上がる地の叫びで、無い腰を上げ、驚きながら。
例えば、雅に空の海を浮き往く船に、無い指を差し、騒ぎ立てながら。

そうして小さな奇跡のような出来事を偶々に見かけ、更に大魚は大きく姿を変えていく。そうした内の老魚の一匹が、やがてくる死の匂いに、無い鼻をこすり、後の世代を担う稚児達の邪魔にならぬよう川縁へと身体を預けようとする。

そこに、鈍く輝く銀色の、曲がった虫のようなものが、老魚の腹にその鋭利な尾先を突き立て、ものすごい力で自身の十倍はあるであろう巨体を陸へ引き上げる。ずるずると気味悪く湿った土の上を引き摺られる感触を味わう老魚は、その含蓄を含んだ白き目で、遠くで一人騒ぎ立てる人間の男の姿を見る。

それを最後に、老魚は深く息を吸った後、暴れる様子もなく息を絶った。

「やった、釣れたよ湯気ちゃん。餌がないと釣りは成功しない、なんて誰が最初に言い出したんだろうね。やっぱりそんなの嘘っぱちだったんだ。餌という姑息な知恵や、疑似餌なんていう文明の機器を使っていく内に、人間は本来の釣りというものを忘れてしまったのだろうね。あーあ、悲しいなあ。こうして僕達は、過去を丸めて捨ててしまうような経験や道具を使い続ける楽で有能な生活をこれからも続けていって、無能で努力家だった昔の偉人達の汗と涙を踏襲もせず、何も考えず踏み台のように踏みつけて成長してゆくんだね。……そうだ、僕はこれを気にベジタリアンになろう。うん、そ

れも窮屈な都会の生活に飽き、一人身で職を転じたような農家の栽培に失敗した安売りの品限定のベジタリアンがいいや。もちろん料理なんて有能なことはいらない。毒も薬も雑草も関係ないね。土から無視ってまわって丸かじりさ。湯気ちゃん、君は僕を馬鹿みたいに思ってた馬鹿を見る目で見て馬鹿にし続けるのだろうけれど、僕はそれでも構わないね。むしろそんな君達文明人を一生蔑視し続けるよ。一人きりの、腐った社会への抗議活動さ。どうだい湯気ちゃん。そんな僕がもしこの先の未来に存在するのだとしたら、とてつもなくカッコイイと思わないかい？」

「……」

早口でまくし立てた男の傍に、湯気は大きめの岩を枕に倒れこむように眠っていた。

それを見て、男はあらら、とわざとらしいように肩をすくめ、自身の頭に軽くこつんと拳を当てた。

「ああ、そういうば湯気ちゃんはどこに来てまだ目を覚ましていないだったね」

そう言う男の手には、長細い竹の棒が握られ、その竿先に釣り糸が垂らされていた。糸の一番端では、銀色の釣り針が魚の腹を一刺しにしていて、息のない魚は重力に負けてだんだんと針に表皮と内側の肉がまくり上げられつつある。男はそれを見て、そつと竿を湯気の方へ傾けた。

魚は慣性に従い、ふらつと湯気の顔にその横腹を宛てがう。男はそつとする一歩手前の笑みを浮かべ、何度も湯気の頬にぺち、ぺちと魚を体当たりさせた。

「……気持ち悪っ」

いつの間にか目を開いていた湯気は、上半身をすくりとあげ、立て膝をつく。

そうして男に非難の目を向け、非難の口を開いた。

「最悪の目覚めだわこれ。死んだ魚の目覚ましビンタって。せめてそいつをメザシにして、洒落として成立させてから起こせよ。お前は笑点見たことねーのか」

「おはよう湯気ちゃん。起きた？」

「見てわかるだろ、ったく。いちいち見てわかることを人に訊いちやうあたりで、お前が人間関係に餓えてることが露見してるよ」

「あらら、きつい言葉だね。確かに僕は友達が少ないけど、」

「少ないじゃなくて、いない、だろ」

「……訂正。あらら、ドきついお暴言だね。確かに僕は友達がいないけど、それは僕が取り捨て選択してるわけじゃなくて、彼らから僕に近づかなくなっていくんだ。だから僕は友達を作らないための努力も何もしてないから、何も悪くない。原因は僕にないんだ」

「その考えが友達をなくす原因だよ。間違いようもなくお前が根因だ。……っか、ここはどこだよ」

一通り文句を吐き散らかした後、湯気は辺りを見渡してそう言った。

「どこも何も、ここぞ」

そう言った男の手からはいつのまにか竹の竿が消えていて、代わりに縦横に折り目のついた地図が握られていた。湯気は一旦目をこすり、その地図の上部分の余白に書きこまれた手書きの文字を見る。

「——ああ、着いたのか」

「そつだよ」

「これが幻想郷だ。良い所だろう？」

男はそう言葉を繕い、腕を湯気の目の前に差し出す格好のまま、気味悪さを感じかける微笑みを浮かべる。

その手には、既に地図の代わりに死んだ魚が握られている。その腹は腸が見え隠れするほどにえぐれていた。

「趣味悪いよ。これが幻想郷か」

目を細め、鼻をつまみながら湯気は嫌味を込めて応える。男は自身の手のひらを見て、わざとらしく驚いて、腕を引っ込める。

「おっと、間違えた。ていうか逃さなきゃね。釣りに一番大切なことは、キャッチアンドリリースの精神さ。それに僕はあれだ。ベジタリアンだって設定なんだよ。湯気ちゃん、知ってた？」

「なんだそりゃ。初めて聞いたっつーか、この前5袋くらいまとめてビーフジャーキー食ってたのを見た気がするんですけど」

「おっと早くも設定崩壊だね。湯気ちゃんは作品の揚げ足を取るのがうまいなあ。もしかして、アンチかい」

「沸くほどお前に興味も人気もねえよ。頭沸いてんのか」

そうやって一通り応酬をした後、男はもう興味がなくなったかのように魚を適当に放り投げる。弧を描いて、砂利の上にべたつと落ちたのを、別に二人は注視しようとも思わなかった。

「さて、西を向いたら分かったちゃう通り、実はもう夕暮れだったり

する。僕は寝袋こそ用意してるけれども、ここで野宿、というのも尺だし、怖い妖怪に食べられちゃうかもしれない。その時は僕は無力だから、湯気ちゃん、君が僕とテントと明日の朝食を守ってあげてくれ。これは君にしかできない仕事だ。辛いかもしれない。死ぬかもしれない。そんな湯気ちゃんを傍目に僕は精精寝たふりに励むことにするよ。それが嫌なら、今晚の宿を探そうよ」

そう提案する男に、テンションの下がった湯気が即答する。

「じゃあここで寝る」

「あっそう」

淡泊な受け答えのしばらく後、男は暖を取るために枝を拾い始める。

湯気はその様子を、手伝いもせずただ見つめていた。

せせらぎ宅配便（後書き）

「っていう物語をこの死んだ目をした死んだ魚を見て考えたのだけれど、湯気ちゃんどうだろう。僕は気に入って欲しいんだけど？」
「癪な態度に気に触れそうだよ」

そんな感じのオチにしようかと思ってもいた。
気づけばちよつと地の文多すぎた。反省。

独白 i

おはようございます、こんにちは。

そしてこんばんは。ミステリア・ローレライと言う者です。

ミステリア・ローレライと言われる存在^モです。

今日は私のことについて話したいです。話します。話しましょう。私はあまり口が良い方とは言われませんが、一生懸命、つたない言葉で話をするので、どうかお耳を傾けてください。いや、耳だけ取って食ったりなんてしませんよ。耳なんて、肉が少なくて皮が噛み切りにくい上に、小骨ばかり。食べにくいじゃないですか。それに、私が貴方の耳を奪ったら、あなたはもう私の歌に耳を奪われることはないじゃないですか。もともと、耳なんて奪う気も、奪う力も、奪う気力もありません。

私に出来ることと言えば、そう。残念ながら私の容姿は人に誇れるようなものではないので、人の目を奪うことしか叶いません。それ以外は、できません。何故でしょう。

人間の脆さ儚さ、というのは妖怪には広く知れ渡っている常識のようなものなのですが、そんな、いつでもいくつでも、全てを奪いきって仕舞いこめそうな存在^モに対し、何故か私達は臆し、何故か私達は非力になってしまふのです。

いいえ、何故なんて問いかけは無意味でした。知っているのです。それだって妖怪の間には深く広まっている常識……いえ、広く深まっている良識なのです。

人間なんて、なんて思いますよ。よく、でも、人間だから、の方が圧倒的によく思います。良く想います。

つまるところ、それなのです。私達は人間を特別扱いするしかないのです。それは誰かが決めた取り決めなどではなく、自然の摂理とでも言いましょうか。とにかく、私達にとって人間とは、絶対的

に格が一つ上、食卓では上座側の存在なのです。私達がいくら人間を食べようと心しても。実際に人間を食べることがあっても。決して、皿の上に座り、私達に振舞われるような存在ではないのです。

しかも、驚くことに人間にとって私達は、いてもいなくても良い存在だということです。それは、人間が一度に産める数の少なさから分かるとおりです。彼らは、この幻想郷ですら例外なく、ヒエラルキーのほぼ頂点に存在しています。つまり、人間にとって妖怪とは、「食う食われないの敵対関係」ではあっても、「食べられても仕方のない捕食関係」を築いてはくれないのです。気付いては、くれないのです。

だけど私達は人間から奪うことでしか生きられません。完全に一方的な依存です。だから、いつも心では思っているのですよ？

——食べてしまつて、ごめんなさい。許してください。見捨てないで。

そう心の底から、心の中へ。

いつだって怖くて仕方がないのです。でも人間は、気付いては、くれないのです。

気付かれて、気疲れさせては、いけないのです。迷惑をかけているのはいつだって妖怪だから。

それでは、食べるとか食べないとか、そんな食えない話をいつまでも頼張るのはやめて、そろそろ本題に入りましょう。

私が生まれたのは、いつ頃でしょうか、よく覚えていませんが、そこまで昔のことじゃなかったと思います。

一つだけ記憶していることがあるとすれば、いえ、そんなifはないのですが。

一つだけ推測できることがあるとすれば。

一つだけ憶測できることがあるとすれば、間違いなく赤子の私は、深い闇に、お母さんの腕のように包まれていたのでしょう。

気がついたら存在心モノコロはついていて、いえそれどころか、既に妖怪としての活動や、意義や、主義主張が、心の中に置かれていました。まるで自然に、それがそれである、と言わんばかりに。私という存在は定義されていたのです。

それからは、一生同じことの繰り返しです。同じことの繰り返しです。

もちろん、一日一日は違っていきますし、何か生きがいとやらを見つけようと思って、八目鰻を焼いて売りさばくことを始めもしました。お客は少ないけど、それなりに楽しいですし、その時だけは人間も妖怪もお客さんです。だからなのでしょう。人間と……：恐怖の対象と、いつもの関係を崩すことができ、笑いながら言葉を交わすことができるから、続けていられるのでしょうか。よく分かりません。妖怪的にはあまりよくないことなのでしょうけれど。

他にも、土地柄、数週間幻想郷中の景色がガラリと変わってしまうことはよくあります。欠けた月の続く夜は、身体に違和感を覚えました。そのせいで、人間に負けたことを今でも覚えています。あの時も、満月の夜ならば勝っていたに違いありません。その人間と、幻想郷中の植物が狂喜乱舞した時期にもう一度立会いました。その時も僅差で負けてしまいましたが、いい勝負だったと思います。友情が芽生えてもおかしくはありません。まあ、ありませんけどね。そう、その人間はありえない方の人間だったのです。たまに屋台に来てくれるので、底々関係は築けているのです。私はそれが無性に嬉しい。無償の愛じゃないけれども、お金を介してはいるけれども。屋台の上だけの平等な関係を初めて築けた人間こそ、その人達だったのです。

でも、だからといって何か変わるかといえば、何も変わりません。妖怪は、存在を固定されています。生きる意義は揺らぎません。生きる意味を問えません。

私はそれが、たまらなく、悔しい。

でも悔しいだけです。それだけでした。

屋台という巢から一步外に出れば、餌の様に運ばれた関係が嘘のようになります。再び私は人間に依存するだけの存在になってしまいます。それだけのために生き続けなければいけません。

それが私の努め。運命と書いて”さだめ”と読むほど、私に根付いた精神ではありません。押し付けられた、やらざるを得ない行為。仕事と書いて”しごと”です。

私は一生、自分がどんな存在なのか考えることさえできない。答えはいつも目の前にあるのです。あってしまうのです。

私は、もっと複雑に、回りくどく、回り道をして、色々な経験を経て、悩みながら、傷つきながら、誰かを支えながら、誰かに支えられながら、ゆっくり、じっくり、確実に、この長い一生を駆け抜けて、その意味を求めたかった！

……私の、生きる意味を求めたかった。

苦々しい私の半生を苦々しく聞いてもらって、ありがとうございます。ます。

痛々しい私の独白を痛々しく知ってもらって、申し訳ありません。白々しい私の告白を白々しく受けてもらって、お見せする顔ありません。

あなたの目を奪い取ってしまいたいくらいには、恥ずかしいです。

でも、あなたに伝えないと、報われないのです。私が。

私はもうすぐ死ぬかもしれないから。あなたに、私の苦しみを知って欲しかった。

そう。

今、私の目の前には、奇妙な男と、奇天烈な女がいます。どちらも人間です。私はこの人達が怖い。

でも、不思議と彼らは憎く思えないのです。人間は、成長し、学び、自らの意義を掴み取る生き物。だから、私は人間を少なからず憎いとも思っているのです。

なのに、彼らを見ると、少なくとも憎からず思えてくるのです。何故かはわかりません。

だからこそ、怖さ。だからこそ、怒り。こいつらは本当に人間なのか？とも思いますが、妖怪として「人間の怖さ」を植えつけられている私の嗅覚が、目の前の二人が人間であることを如実に証明しています。

怖くて、いまいまして、嫌だから。消えて欲しいから。

私は二人に、言葉を投げかけました。

その話は、また今度。というか、次の話で。

独白 i (後書き)

一人称やってみました。やっぱり一人称の方が好き。

またたき宅配便

「待てよ」

朝焼けを背景に、一瞥して立ち去ろうとする男と、見向きもせず既に立ち去りかけた湯気の背中に、そう声を掛けたのは、もはや気骨だけを支えとして立っていると言っても過言ではないような、苦痛に満ちた表情のミステリア・ローレライである。

名もわからぬ広葉樹の根幹に、投げつけられたように背を持たれかけていた彼女の足元には、背中の翼から無残にもこぼれ落ちた羽根が、無数に散らばっていた。それを、辛うじて動く右足で踏みつけ片膝を立て、男を睨みつける。

「どうしたのローレライちゃん。何か気になることでもあったのかい」

男はそう、邪気を感じかける無邪気な笑顔で応える。

その右手の人差し指と中指に挟むようにして、ミステリアの羽根の一片が掴まれている。

「……どうしてもこうしたもないわ。よくも私の歌を邪魔してくれたわね」

自身を半分殺した人間達に、搾り出すように啖呵を切り続けるミステリアの姿は、傍からは無謀にして無策のようにしか見えない。事実、彼女はもう何も考えてはいなかった。ただ、この、気持ち良くて、気持ち悪くて、気持ちのしない、曖昧な存在達に、苦言を呈さずにはいられなかったのである。

人間は、怖いのだ。だって人間だから。周りのことは考えない、自分のことしか考えない。邪気を含む妖怪の怖さにとって、その無邪気さ由来の怖さは底に到らないものである。

でも、こいつは『人間すぎる』。あまりにも妖怪にとつての人間のイメージ、そのまますぎる。その要領の得なさ、得体の知れなさは、激高せざるを得ない。

一挙一動が一々、癪に障る。人間の怖さに対する威嚇としての怒りが、ふつふつとこみ上げていく。牽制や奮起のための怒りの度合いではない。ミスティアは今、憤怒しつつある。

そんな気持ちをあしらうかのように、いつもより冷たい、卑下するような目線の男。しかし声の調子は、いつもの激しい抑揚をつけた、ふざけたようなピエロの声である。

「君は人生を”歌”と表現するのかい。詩的だね。素敵だね。感動したから、歌の件については謝らなきゃいけないね。ごめんね、ちよつと五月蠅かったから。……つて、湯気ちゃんが言ってた」

言つた覚えのないことを言つたことにされた湯気は、少しだけ首を後ろに回しかける形で反応したが、結局は後ろ向きのまま、律儀にミスティアの言葉に従つて立ち止まり続けていた。

ミスティアはそんな調子の二人に、行き場の塞がれた激しい怒りを更に突き上げられる感覚を覚える。

「貴方は責任転嫁が趣味なのかしら？　いいえ、無責任放火かしらね」

「漢字が違つよローレライちゃん」

そんなこと分かつてるわ、と皮肉が理解されなかったミスティア

はいらだちを隠さずにはいられなかった。

それを尻目に、男は言い訳を始める。保身のためではない、極めて暴力的な言い訳を。

「それに、僕は本当のことを言っただけなんだよ。一字一句間違えず、僕は湯気ちゃんの言葉を伝えたまでだ。つまり」

「僕は悪くない」

「湯気ちゃんと君と会って、拳を交わし合ってから、こうして僕が君と目を合わせ続けるまでの終始において、僕は君に何か害なした覚えはない。つまり、僕に責任はないんだ」

その言葉は、ミステリアの瞳孔をキュウと狭めた。余力のないはずの身体を震わせた。歯をぎりぎりど摺り合わせた。何よりも、彼女の心の内の恐怖を全て、怒りで、塗り替えさせた。

「五月蠅あ……」

[illegible]

ミステイアは殴り『かかった』。

立たない足を無理やり立たせ、羽ばたけない翼で引き摺りながら

飛んで、彼女は男に殴りかかった。しかし、体の節々の苦痛はごまかせず、人の歩く程度の速さでしか移動できない。結局その拳は、男の頬を打つことはなかった。

それでも彼女が男の襟首に爪を立てられるのは、収まらないミステリアの怒りが執念に変わったからであり、そしてそれを避ける必要性もないと言わんばかりに男がまるで動かず、ただ微笑んでミステリアを蔑んでいたからである。

「いい加減にしなさいよ、いや、しろよこの人間！ 夜雀だからって、小さい妖怪だからって、いくら何でもっ！ クる頭はとつくに過ぎ越したわ！」

「怒髪天を衝く、という言葉があるじゃない……けれど、脳天を越えた怒りはどうなるか、って思ってたのよね。なるほどね！ 私今、これ以上ないってくらい冴えているのよ！」

「……こうやって掴まれた以上、貴方に逃げ場はない。……死んでも離すもんですか。貴方モテなさそうだから、女子から襟首掴まれて、こんな台詞吐かれたらどうなのよ。卒倒しそうになっているんじゃないかしら？」

「でもあいにく、私は貴方がタイプじゃない。ていうか世界中探しても、貴方と生涯を共にしたい人間なんている訳がない、いてたまるもんか、いたら私が殺す！」

「貴方に勝てる力があるとかないとか、そんなの関係ないわ。奪える目がなくなつたって、奪える心がなくなつたって！ ……もう、私は貴方から何かを得ようとする気はないもの。」

「貴方は、殺すのよ。殺す。絶対殺す。何が何でも殺す。殺す。殺す。私が殺されても殺す。殺しても殺す。殺し続けて殺す。殺す」

「だから死ねよ」

そうして捲し立てた後、男の首に迷いなく手をかけるミステリア

の目には、何も動じることもない、先ほどと同じような気持ち悪くなりかける微笑が、至近距離で写っていた。

「……何黙ってんのよ！ 何か言いなさいよ、殺すから！ ていうかさつきから言いたかったんだけど、ローレイ、じゃなくてミステイアって呼びなさいよ、殺すから！ ……いや、やっぱし嫌だ！ 貴方に呼ばれる名前なんて聴きたくもないわ！ 死ね」

既に貫いた怒りを呼び戻すかのように、手の先に力をかけ、男の首を締めていく。戦いで折れた、元は長かった爪の、尖った部分が男の皮膚を貫き、肉に刺さる。

その感触だけで狂喜乱舞できるような幸せを感じたミステイアは、踊り出してしまいそうなのをぐっと我慢して、手をかけ続ける。

ミステイアの頬は不自然に釣り上がり、狂気に満ちた笑顔を形成する。その口で、ミステイアは心からひねり出した言葉を解き放った。

「死んでよ、存在不確定野郎。今度はアンタに歌ってあげる！」

「ん、ああ、パス。絶対嫌だ。君に歌われる歌なんて聴きたくもない」

その拒絶の言葉は、ようやく口を開いた男のものだった。

歌を拒否されたミステイアは、一瞬何を言われたのか理解ができなかった。

「は」

「は？」

「はあ！？」

「アンタに拒否権はないってーのよ！ 耳を奪われ酔いしれて、潰れて地獄で果てなさい！」

心の内をそのまま吐き散らかすミスティア。依然、その腕は男の首に力を入れ続けたままである。

「だから、嫌だつてば。そんなに自分の歌に自信があるの？ これからもその歌声を自慢気に吐き散らかす気があるのかい。なら、これ言うのは良心が苛むんで自重してただけど、それを止める目的で言うておこつ。耳栓レベルだぜ、君の歌は」

しかし、それをまるで自分のことではないかのように、露程も気にしていないような態度の男は、声帯が締められて少しだけザラついた声で、挑発を繰り返す。

ミスティアはもはや理性を保つことを放棄していた。全身がこの男を殺せと蜂起している。

「人間だからって、私の歌を否定しないでくれないかな。殺すよ。既に殺しかけてるんだけどさ。ていうか、そろそろ死なないかな」

人間のくせに、私の歌を否定するな。私の全てそのもののくせに、私の全てを否定するな。

……何も分かってくれない。そんな人間だから、

「もう、終わりにしようよ」

「賛成だね。終わりにしよう」

声はだいぶ苦しげになってきたものの、どこまでも調子の狂わな
い、調子の狂う笑顔で男は頷く。そして、首を横に傾けて、流し目
で湯気を見て、こう告げた。

「助けて、湯気ちゃん」

行き場のない怒りが自らを殺したのか。それとも、奴らに殺され
たのか。

ともかく、ミステリアの意識はそこで途切れる。

「殺す」

気がついたミステリアは、開口一番そう言い放つ。そして、どう
やら殺せないらしいと知った後、自分が殺されていないことを知っ
た。

何を殺すのだったか、何に殺されるのだったか。もうよく覚えて
はいない。

空は既に朱に染まっていて、西の方に太陽が沈んでいるのが見え
る。日をまたいだのかは知れないが、どうやらお昼は過ぎたらしい。
八目鰻の仕込みをしなければ、と思い、大木に持たれかけている
背を上げて、立ち上がるうとするも、瞬間足に苦痛が起きる。

ああ、立てないな。と漠然と思うミステリアの目の前に手が差し
伸べられる。

「立てるかい」

ミスティアは、その手を齧った。

正確には、空気を齧った。

「やつほ、ローレライちゃん。やっと起きたね」

ミスティアは自分が殺すべき相手を思い出した。その男が目の前にいる。だから殺そうとした。

もはや反射的に男を殺そうとする自分に対して、彼女は何の感慨も抱かない。

「殺す」

男は慌てたような身振りと、全然慌てていないような顔と、子供をなだめるような声で、ミスティアに言葉をかける。

「ちょっと待ってよローレライちゃん。後でちゃんと殺されるから、今は僕達の話聞いてくれ」

「殺すよ。後で殺す。殺されるよ、絶対」

もはや、殺せばなんでも良いと言わんばかりに、ミスティア・ローレライは捲し立てた。

「ありがとう、優しいねローレライちゃんは。で、まあいきなり本題なんだけどさ、僕らって君に『待て』って言われたから、ずっと待ってたんだけど、そろそろ辛抱効なくなっちゃってさ。いや、別にここでまた野宿してもいいんだけどね。さすがに昨日から一步も動いていないってのはどうかと思うんだよ。僕達にもやることあるし。寝込みに僕達に襲いかかった君のせいなんだよ。その上、一

晩かけて片付けてあげたら『待て』って言われて、もうどうすればいいのって感じでさ。でもまあ君のボロボロで無残で畜生みたいな姿を見たら、可哀想に思えてきてね。それでせっかくだから待ってあげることにしたんだよ。で、ローレライちゃん」

「もう行つていいかい？」

男は、見たものの鳥肌が立ってしまう手前のような笑みを浮かべながら、ミスティアにそう催促した。

「殺す」

「だから、後で殺されてあげるんだってば。今は見逃してくれよ、頼むから」

「殺す」

もはや何を言っても、耳を奪われたように。何を見せても、目を奪われたように。ミスティアは繰り返し返した。そんな彼女を見て、男はハアとわざとらしく大きなため息を一つつき、こう提案した。

「あー、じゃあもういいや。ローレライちゃん。僕の言うことを復唱してほしい。それで手打ちにしよう」

そう言うのと、一呼吸開けて、男は言葉を続けた。

「『行つていいよ』。リピートアフターミー、はい」

少しの間があり。憎々しげな目を絶やさずに彼女は言葉をなぞつた。

「『逝つていいよ』」

「ん。ありがとう」

用が済んだ、とばかりに背を向けた男を、強く、強く睨みつける
ミスティア・ローレイ。しかし、その男をこれ以上どうこうする
ことは出来ない。殺すことは、出来ない。

男が道の先に消えて見えなくなる瞬間まで、彼女は目尻に悔し涙
を溜めながら、殺せなかったことを後悔し続けた。そしてその姿が
視界から消えた瞬間、彼女は再び意識を途切れさせることとなる。

そんな思いを露程も知らず、汲みもせず、苦にもせず。

男はようやく、先を歩く湯気を追う形で、無い往路を歩き始める。

二人の背では、宵の明星が、黄昏時を過ぎた天蓋で、一際大きく
輝いていた。

またたき宅配便（後書き）

やったね、ファーストバトルをすっ飛ばしたよ！
若干わかりにくいかな、一応負けた地点から開始です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4073v/>

妖土珍奇 ～ 普通に幻想入り～

2011年10月9日13時53分発行